

# Graduation

## CEREMONY

学院通信 第298号

2025 Winter term



卒業終業  
礼拝

今年度の卒業終業礼拝には16名の高校3年生が出席しました。例年はほとんどの高校3年生が3学期は日本で大学入学前の準備をしていますが、今年度は高校3年生の希望者を対象に6週間の「Pre-University Immersion Programme」が行われ、赤ネクタイの最上級生がキャンパスを行き交う姿が見られる例年とは少し違う3学期となりました。

その他にも中学校3年生を中心とする有志が近くの町のマーケットで日本文化を紹介する新しい試みや、パリオリンピックの馬術競技でメダルを獲得した「初老Japan」の方々が学校を訪れて講演をしてくださったりと短い3学期に彩と活気を与えてくれました。

もちろん国際交流も盛んにおこなわれ、高校生はイギリスの大学見学に行って大きな刺激を受けて来たようです。

Contents...

- \* 卒業終業礼拝祝辞
- \* 卒業生スピーチ
- \* School Outing
- \* School Events
- \* 生徒会活動
- \* 高3特別プログラム
- \* Winter Japanese Market
- \* 退職教員メッセージ
- \* Photo Gallary

# Congratulatory Address

Minister and Consul-General at the Embassy of Japan in the UK Mr.Kaoru Magosaki  
在英國公使兼總領事 孫崎馨 様

ご祝辞

Dear Students, ladies and gentlemen,

It is a great honour to come back here to celebrate the graduation today.

I am not a Rikkyo Alumni, but, having studied at a boarding school in Japan, I feel that I share a few things with you. Of course, each school is different. I used to complain that the only thing about my school that had come from England was the modest quality of the canteen, which I believe isn't the case here. However, there are things in common, among which is the appreciation about the unique opportunities that a boarding school offers.

In a boarding school, we spend more time with our classmates than in other schools. You would appreciate, in future, if not now, how privileged the extra time you spent with your friends proves to be, but you might have found some of your classmates not quite agreeable. I did.

If we came to school from home, we would enjoy seclusion from such a classmate after school. In a boarding school, there is no such luxury. We have to live with each other. Denying that will only make our lives harder.

Such a feeling comes back from time to time after graduation. In fact, when I worked at the United Nations, before coming to London, I felt it was a bit like the boarding school. All one hundred and ninety-three member states have many things in common, but they are different from each other. And, there are bound to be some member states with whom you do not see eye-to-eye. There will always be member states who does not share our agenda, or worse, who are jealous or jealous or hostile.

These members will not go away -- until we have no countries, which is unfortunately so hard, and simply unimaginable. We have to live with others. We have to recognise others. And, we have to respect others as equal members. Even if we do not actually like them.



Some of you might pursue the career at the Foreign Service or the United Nations to experience this for yourself. But the United Nations is not another world. From time to time, you will feel that the minimum respect you pay to your classmates, whether you love them or not, has prepared you to be a responsible member of the society.

I know you can be successful in many other areas as well. But whatever you achieve in future, what the teachers and staff gave you, and what you shared your friends will always help you.

Congratulations

# Graduation Speech

僕はこの一年間で人前に立って堂々と発表ができ、みんなと協力して何かを成し遂げができる人になりました。みんなの前で発表し、みんなで協力していくことは人生にとってとても重要な社会人になった時に必要となると思います。

僕がこの1年間でできるようになったことを2つお伝えします。まず1つ目は発表を自分からできるようになったことです。僕は、日本にいた時は自分に自信がなく、自分から発表したり人前に出たりすることをしてきていました。ですが、この学校に来て生徒会の人たちが、原稿に書いてあるものを読むだけじゃなく、その場に応じた喋り方をしているのを見ました。その発表を聞くたびに「そういう人になりたいな。」と思いました。僕は日本の小学校にいたときより立教で生活している方が人前に立つ機会が多いです。たとえば、2学期の時に小6のみんなで提案した挨拶週間の発表やたまにクラスに回ってくる聖書朗読などです。日本の学校にいるときは全校生徒の前で話すことだったりクラスのみんなの前で発表することがなかったので人前で話すことに少し抵抗がありました。クラスで意見を発表するときもいつも手を上げていませんでした。でもこの学校に来たことで軽音楽部の立教フェスや礼拝の朗読で喋ることや演じることが増えて前の自分と比べたら抵抗がなくなった気がします。今年はあいさつ運動とスクールアウティング実行委員などで自分から立つ機会を作ることができました。去年よりも自信はつきましたがまだまだ100%の自信があるわけではないです。だからこれからも、積極的に人前に立つ機会を増やしていきたいです。

2つ目は団結力が上がったことです。僕がこの一年で一番団結力を必要としたときは、軽音楽部の練習のときです。みんなで「ここの部分合わせよう。」とか「次の練習までにここをできるようになろう。」とかを話したりして、「演奏を合わせる」というのは自分にとってとても難しかったです。僕はドラムをやっていて、曲のリズムを作る役でした。初めての立教フェスでは人生の中で一番と言っていいほど緊張しました。でも演奏しているうちにどんどん緊張が和らいでいきました。これは今までの練習の成果とみんなとの団結力だと思います。他に団結力が必要となったときはオープンデイです。小学生は日本のお祭りについて出し物をしました。オープンデイで一番大変だった作業は鳥居作りでした。体育館でみんなで柱に色を塗ったりニューホールで形を整えたりして、クラスみんなが関わって作り上げた作品です。他にも分担しておみくじ、ロボットずもう、お賽銭、金魚すくいに分けて作業を進めていました。これらがこの一年の立教生活で最も成長したなと思うことについてです。

この1年間の立教生活の経験を通じてこれから的生活に活かしていきたいです。この今説明した2つのことだけでなく他のことについても大きく成長して行きたいです。

小学部 卒業生スピーチ



# Graduation Speech

## 中学部 卒業生スピーチ



まず、皆さん、本日はご卒業おめでとうございます。

今こうしてこの場に立ち、卒業のスピーチをしている自分がいるなんて、入学した頃には想像もしていませんでした。でも、あっという間に月日は流れ、今日という日を迎えました。

振り返ると、この学校での毎日は本当にかけがえのない時間だったと思います。今日は皆さんに僕が立教で得たものの中でも一番大切なことをお話ししたいと思います。

人間は、自然界にある様々なものに依存しながら生きています。空気、水、食料、それらの自然の生み出す物に依存しなければ生きていけません。しかし、それだけでは生きてはいけません。人間が生きていくために不可欠なもの、それは社会です。社会の中でたくさんの他者に頼りつつ、自らも頼られる、そういう社会の一員であることが人間であることだと思います。まさに、「人は独りでは生きていけない」動物なのです。

ここ立教英國学院では、無理矢理でも、誰かと一緒にいなければいけません。それはいいことでもありますが、嫌な奴や、苦手な人と常に関わっていなければいけない環境に苦しむことが多いと思います。ですがそれは、思ったより悪いことでもありません。どのように接したらいいかや、対処の仕方など、人間関係について学ぶことができます。将来、社会に出ると、誰しも人間関係に悩まされるでしょう。立教英國学院では人間関係とコミュニケーション能力を学ぶ点では、どこの学校よりも優れていると僕は思います。良い点は、最高の友達を見つけることができることです。

中学校生活を、友達の存在なしに語ることはできません。友達とは、互いに心から信頼し、嬉しいときも、楽しいときも、辛いときも、感情を共有することのできる大切な存在です。

ここではそんな友達を見つけることができます。中学では、友達がいなければ何も成り立ちませんでした。例えば、最近だと受験の時期。立教英國学院では高校受験をする人がほとんどいません。大半の生徒がそのまま高等部に進学します。そんな中、僕は受験に挑戦することを決めました。それは友達の影響が大きかったと思います。色々なことがうまくいかずに辛かった時、話を聞き、慰め、そして「一緒に頑張ろう」など、声をかけて励ましてくれました。そんな一緒に頑張ることができる友達がいたから僕は頑張れたと思います。行事のたび、休みのたびに、毎日毎日、友達との思い出は増えました。しょうもないことでふざけ合ったり、先生に怒られたり、何気ない会話が好きでした。話すと嫌なことを忘れられましたし、友達のおかげで中学校生活を楽しむことができたと思います。

ですが今日で卒業です。中学三年間は本当に一瞬でした。後悔することも山程あります。今ある、何気ない平和な日常が突然なくなってしまうことだってあり得ることです。時間は有限です。人生のうちの学生生活なんてほんと一瞬しかありません。ですが1日24時間という時間はすべての人に平等に与えられています。時間は有限です。後悔のないよう大事な人との関わりを大切にしましょう。



# Graduation Speech

## 中学部 卒業生スピーチ



ここからはそんな僕を支えてくれた人たちをお話したいと思います。小6の二学期に僕は立教に入学しました。親元を離れて1人でイギリスの学校に行くというのは当時小6だった僕にはとても不安なものでした。ですが空港につくとすぐに、話しかけてくれて、とても嬉しかったです。小学生みんなが優しく接してくれたのですぐ安心したのを覚えています。編入生だったので仲良くなれるか不安でしたが、小学生みんなで走りまわって遊んだ毎日は忘れません。

小6では男子2人に、女子3人の5人だけでしたが、中1では、15人にも増えました。初日では、みんな気まずくて仲良く慣れるか不安でしたが、校章を自分たちで縫ったときに、初めて隣の席だった子と仲良くなれたのを覚えています。

初めてのアウティングではバスで、四時間かけて、ドーバーに行きました。遠すぎだろ、とみんなで不満を言ってましたが、おそろいのサングラスを買ったり、迷子になった人もいたけれど、なんだかんだ楽しめました。懐かしいですね、今ではいい思い出です。

中2では、初めての挑戦が多かったです。体育祭では、みんなでジャンボリミッキーを前日ぐらいから練習して、踊ったり、軽音のライブや、ダンス部のスター・ビビッツ、生徒会などにもみんな挑戦していました。あの緊張感や、大変で逃げたくなった練習期間も本当にいい思い出です。そして、特に男子は、自由にやりたい放題、ふざけていて、何回もみんなで先生に怒られていたと思います。教室でスイッチをしたり、しょうもないことで喧嘩したり、あげたら数え切れません。先生には迷惑をたくさんかけたと思いますが、今思い返すとそんな時期があったからこそ、今の元気な、M3があると思います。

中3では、中学校の最上級生ということもあります、みんなやっと少し落ちついてきました。受験生という自覚が芽生えたのか、みんな勉強も熱心に頑張っていたと思います。特に思い出に残っているのは、やっぱりオープンデイです。新入生が、8人も入ってきたけど「高校生に勝つぞ」とリーダー中心に団結して、一人ひとりがみんなのために努力していて、窓の飾りつけなどで、意見が食い違い、喧嘩もありましたが、それもこみで最高の作品を作り上げることができたと思います。このみんなで作り上げた居酒屋は一生忘れません。



そして、お父さん、お母さん。いつもは照れくさくて言えないのですが、この場を借りて言わせてください。素直になれず反抗ばかりだったこの三年間。それでもずっと寄り添い、静かに見守ってくれた両親。義務教育終了の今日まで育ててくれて本当にありがとうございました。これからも迷惑は何度もかけるだろうけど、これからもたくさん成長していく僕達の姿を一番近くで見ていてください。そして、今まで支えてくださいた、後輩や、先輩の皆さん、教員の方々、事務スタッフ、キッチンスタッフ、クリーニングレディースの方々、みなさんがいたから僕達の学校生活が成り立っていました。M3を代表して言わせてください。ありがとうございました。

Thank you so much to the kitchen staff, office staff, and cleaning ladies.

中3の先生方、長い間ありがとうございました。いつも笑顔で僕たちに寄り添ってくれた須賀先生、中1から中3までの三年間、山縣先生は、みんなのお母さんのような存在でした。そして、時には厳しく僕たちを正してくれた早川先生、そんな先生方の指導があったからこそ僕たちは成長できました。感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

そして、3年生の仲間たち。くだらないことではしゃいだり、時には、喧嘩をして気まずくなったりすることもありましたね。一緒に泣いたり、笑ったりしたことは、今となつてはその全てがかけがえのない大切な宝物です。それも今日で最後だと思うと、本当に寂しい気持ちでいっぱいです。立教で過ごした日々を忘れずに、それぞれが自分の輝く未来を切り開いていきましょう。

3年間本当にありがとうございました。



# Graduation Speech

## 高等部 卒業生 スピーチ



いきなりですが、僕はスピーチをする上で大事なのは「言葉の重み」だと思っています。僕がこのスピーチをすることになつてから「言葉の重み」をつけると言うことを、みんながこの学校にいる間、1秒も欠かさずに考えてきました。完全に持論ですが、「言葉の重みは体重に比例する」と思つてゐるんですよ。だから体重がちょっと増えました。太つたわけじゃありません。何が言いたいかと言うと、このスピーチをするために、割とガチで準備してきていると言うことです。耳を傾けてくれると嬉しいと思います。

There is no doubt that I made a determined effort to do this graduation speech. In order to do a good speech, I achieved 100 KG in the bench press. This is because I have a prejudice of a person who can make a good speech should have a great body. Therefore, I worked hard in weight training. On the other hand, please keep a secret that I put on weight roughly 10 Kg. Some might think that it is not a great body, but it doesn't matter.

I've spent my life of being at Rikkyo school for the past seven years and I have had a lot of wonderful experiences. Today I want to talk about this in my mother tongue, sorry! Today I'm going to talk about 別れと感謝。

僕は卒業という現実を突きつけられて初めて、一年二年三年を振り返り、友達や先生を思い返しました。改めて思うのは、「この学校、変わつてゐるなあ」ということです。休みに関係なく毎日決まった時間に起きて寝て、礼拝を受け、ほぼ毎食全員で食事をとる。変わつていますよね。でも一番変わつているのは、今この瞬間かもしれません。それは何か。「別れ」です。

特殊な学校で過ごしてきた以上、僕たちが経験する「別れ」っていうのは同じようにちょっと特殊だと思うんです。よくスピーチとかでありがちな言葉で、別れはスタート的な言葉が出回つてますが、立教英國学院では違うと思うんです。どういうことか、ここでの別れは『再会』。身体は離れても、心では一つに集まることができる。だから別れを持ってスタートしようとしても、この学校のみんなが一生ついて回つてることです。ちょっと恐ろしいかもしれません笑。でもなぜこの学校の別れが再会と言えるのか。それは最初に言ったような起床・礼拝・食事・就寝。こういう学校の変わつてゐる生活があるからこそだと思うのです。この生活が僕たちの絆を深めていただけではなく、この学校での一場面一瞬はこの先の未来でも、今までと全く変わらない大家族であり続けるための過程だった。自分が嬉しい時でも、苦しい時でも、話を聞いてくれて、応援してくれて、暖かく迎え入れてくれる人。それがこの先の未来でも変わらずに立教英國学院生。こんな学校、他にないでしょ？だからそういう意味では、僕はこの学校を世界で一番良い学校だと思ってるんです。

その一方で、こういう生活の立教英國学院は、社会・世間に比べたらものすごく狭くて小さい環境であることは自覚しておかなければいけないと思います。だからこそこの先、自分でもどうしようもないくらい「もう無理」と思う瞬間に出会うことは当たり前だと思うんです。でもそういう時こそ大事にしてほしいのは、視野の広さだと思うんです。高三の夏休み、自分の進路で英国大学に行くという決断をする時、なかなかその決断をしきることができませんでした。というのも僕の進路相談に乗ってくれたたくさん的人が、僕がイギリス大学に行くというその決断の理由に甘さを感じていたからです。毎日、自己分析をしてみたり、一から理由を考え直したりして、何度も書き直しました。それでも「別に、推薦で行ける大学に行くことが負けとかじゃないからね」そう言われた時、本当に心の底から「あ、もうダメかも」そう思いました。僕にとっては少なくとも、かなりキツくて辛くて、本当に苦しかったし、自分の視野が狭くなっている瞬間でした。



# Graduation Speech



それでも学校には普通にいかないといけなくて、いつも通りにイギリスについて後に親と親戚にラインで「今つきました、ありがとう」といいました。でもその時だけ、「いや何にありがとうって言っているんだろう」って思っちゃったんです。でもそういうふうに考えてみると何に感謝しているのかわからないけど感謝をするタイミングって結構多いことに気がついたんです。朝起きる時、ご飯を食べる前、夜寝る前。直接ありがとうとは言わなくても感謝を持つ瞬間っていうのがあると思うんです。でも正直これって誰に向けていているだろう。そう考えながら、また誰かを納得させるための理由を作るために、自分の人生というものを見直してみたんです。でもそのとき気がついたんです。感謝っていうのはいつも誰かに対して使う言葉じゃない、今この瞬間にに対して使う言葉なんじゃないかなって。だって自分が今ここに存在しているのが奇跡だからです。親がいて、その両方にまた親がいて、そのお互いが偶然出会って、結婚して、今の両親が生まれて、どこで出会ったのかは知らないけれど、75億人の内で今の2人が結ばれて、今自分が生まれている。偶然の中で立教英国学院を知って入学ができて、7年間過ごすことができて、今この場で卒業スピーチをしている。これ以上の奇跡って他にあります？ あつたら教えて欲しいくらいです笑。今分がこの場にいること、これに「ありがとう」と表現するんだと思うんです。これに気がついた時、誰かを説得するために必死になっていた僕も、まずこんな悩みを抱えていること自体感謝するべきだし、幸せでしようがないことなんだ。気が楽になつたし、誰かを説得するための理由ではなく本当に思っていることを素直に伝えればいい。そう思えたんです。

## 高等部 卒業生スピーチ



これを踏まえてこの場でみんなに伝えたいのは、自分の視野が狭くなっている時こそ感謝の視野を広げてほしいということ。それは日常でするような何気ない感謝の大前提にあるのは、自分を支えてくれている親、友達なんかじゃない。まず自分なんだ。そう気づけることです。ものすごい感じが悪く聞こえるかもしれない。でもそれが実際、自分の目の前の壁をなくしはしないけど、だけどその壁の難易度を下げ、逆境が逆境じゃなくなり、苦しかったのが苦しくなったりすし、最終的には自分はイギリス大学に進学することができた。感謝一つが、自分を救うと思うんです。こういうふうに今自分が存在していることの奇跡に気づくことができて初めて、自分を支えてくれている親、友達への感謝っていうのが生まれるんだと思います。今こうしてみんなに長々と話しているのは、みんなにやって欲しいことがあるからです。この話を聞いた上で、親の元に帰つたらおつきい声でこころの底からありがとう、そう言ってほしいんです。

The reason why I am able to think like this is because of the time in this Rikkyo school.

Therefore, I would like to take a moment to express my gratitude to the domestic staff, maintenance team, administrative staff, kitchen staff, and English teachers. Thank you everyone, thank you for everything.

長くなつて申し訳ありませんでした。でも、こういうふうに考えられるようになったのも、親元を離れてまで生徒と家族のような生活をしているこの学校にいたからだと思うんです。ですが間もなく、立教英国学院で最も変わっていて尊い瞬間：別れです。これをすること、これができること、こんなすごい奇跡に感謝をもって、僕の言葉の締めとさせていただきます。ではせっかくですし、これをやるのも人生で最後になるかもしれないのに、高三のみんなは挨拶をして終わりましょうか。起立。きをつけ。礼。

# School Outing

## 人生の大先輩から学んだこと(UCL訪問から)

今回のアウティングでは、UCL（ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン）に行って、UCLの雰囲気や、大学の環境について直接自分の体で感じることができました。実際に、大学のキャンパスや、教室、図書館を見学して、今までやふやだった大学生活のイメージがより具体的になりました。。また、UCL見学では、大沼教授のお話を聞く機会がありました。特に教授が「好きなことをし続ければ必ず道が開かれていく」のようなことを言ったのは印象深かったです。最初からはっきりとしたビジョンがなくても、興味のあることを追求し続けることで自分の進むべき道が自然と見えてくるのだと感じました。大沼教授は今は目の研究をしていらっしゃいますが、高校時代はずっと囲碁や将棋をしていたと話していました。その経験を聞いて、人生の大先輩と自分が重なる部分があり、とても共感しました。自分もまだ具体的にこの職業に就きたいなどの明確な目標はありません。しかし好きなこと、そして興味がある分野を大切にしながら学び続けることで、自然と将来の道が見つかるのではないかと思いました。また、今回の大学見学を踏まえて私は、高校二年生になるまでに、自分の好きなことや興味がある分野を探求し、知識を深めていきたいとおもいます。そして、高校生活の中で、新しいことに挑戦し、自分の可能性を広げていきたいです。

（高等部1年男子）

High School 1  
University College London

1月31日、スクールアウティングの日に、高校1年生はUCL(University College London)に大学訪問に行ってきました。在校生のお話を聞いたり、日本人でUCLの教授の大沼先生のお話を伺い、Eye Openingな体験となつたようです。

今回の OutingでUCLを見学したこと、改めて、大学や将来がそう遠くないだと話だと実感しました。今やっていることが、自分自身の知らぬ間に将来に繋がっていて、価値観や感性を生み出していると深く感じました。どの大学に行くにせよ、どの企業に就職するにせよ、将来何者になるにせよ、私に今あるものと言えば、結局、時だと気付かされました。自分のやりたいこと、興味があるものをやる為には、少なからず知識が必要で、それを学び、自分のものにする場所こそが大学だと感じられた良い機会になりました。これから高校生活をより、有意義なものにする為にも、沢山の経験をしたいと思いました。1日のちょっとしたルーティンを作つてみたり、自習時間のonとoffの切り替えを意識したり、小さなことから一歩ずつ頑張っていきたいと思います。





小学生英語:Pancake Dayにキッチンスタッフとパンケーキ作りを満喫！

# Pancake Day

パンケーキデーとは、クリスチヤンの人たちが、イースター(復活祭)前のレントの間に、行う40日間の断食期間を前に、戸棚の中の卵や牛乳を使い切るためにパンケーキを作ったのが始まりと言われています。

小学生の英語の授業では英語を使いながらイギリスのイベントについても学びます。

パンケーキデーの歴史について学んでから、キッチンスタッフの協力のもと自分たちで生地から作りそれぞれ自分たちのパンケーキを作りました。

イギリスのパンケーキはふっくらしたものではなく、どちらかというとクレープのような感じです。レモンと砂糖をかけて食べるのがイギリス式です。

*School Events*  
Paris Olympic

パリオリンピック総合馬術団体メンバーの大岩義明さん、北島隆三さん、田中俊幸さんによる講演会が本校で開かれました。自己紹介から始まり、競技のこと、オリンピックのこと、馬のことなどについて刺激的なお話をたくさんしていただきました。そしてなんと、本物のメダルを一人一人に回して見せていただき、とても感動的な機会となりました。



総合馬術団体の  
皆さん來校！

# 生徒会活動

まだ何者でもなかった一年前の自分を思い返すと、生徒会として過ごしたこの一年は私の人生の中でも欠かせない節目になったと思います。一年間しかない生徒会で、私が信念として掲げてきたのは、「学校にとって必要な存在となること」でした。一度しかない高校生活、ただの生徒として終えるくらいなら学校側も自分を欲してくれる生徒になろうと考えました。結果的に今の自分はこの学校を変えるのに必要不可欠な存在になれたと感じています。

そんな思いを軸に力戦奮闘してきましたが、我々が実績を積めたのは生徒部の先生方のご尽力のおかげに他なりません。先生方は、我々のどんな稚拙な企画書でもきちんとリアクションしてくださいました。ときには容赦なくダメ出しをされめげることもありましたが、それは先生方がそれだけ我々に期待してくれていたということではないでしょうか。「この子達なら必ず企画を練り上げてくれる」という先生方からの一種の信頼があったからこそ、意外にもはっきりとNOをぶつけてもらえることが心底嬉しく感じましたし、妥協せず心血を注ごうと思えました。

そのような情熱と器量をもった先生方や個性的なメンバーとこの学校で改革を行ったことはすでに自分の糧になっています。そして、自分が学校の歴史に変革をもたらしたと思うと誇りと安堵でいっぱいです。

本当にこの経験をさせてくださったすべての方に感謝しかありません。一年間ありがとうございました。

第52代 副生徒会長(高等部2年生 女子)

第52代生徒会もまた様々な改革を打ち出し実行してきました。中でも「ルールメイキング」は生徒と学校が共に豊かな暮らしが出来るように導いてくれた画期的な試みで、また一つ立教英國学院の歴史が塗り替えられることになりました。



「学校にとって必要な存在になること」

# 生徒会活動

# Students Council

立教英國学院は、まさに変革を迎える時期にあると感じていました。第52代生徒会はこれまでにない取り組みを実施し、半世紀を超えた立教英國学院をさらに進化させることを目指しました。私は、その生徒会の一員として活動し、大きな影響力を持つ立場で学校の変革に携わりました。

生徒会長立候補時の選挙では、「早速ですが、単刀直入に言わせていただきます。この学校を変えるのは僕です。一緒に変革を起こしましょう。」と力強く宣言し、最後には「皆さん、今こそ一緒に立ち上がり、良い変化、そして良い進化を実現させましょう！今しかありません！」という言葉で締めくくりました。

私が取り組んだ主に2つのプロジェクトについて説明します。

## ◎ルールメイキングプロジェクトについて

生徒会発足時、立教英國学院には様々な課題があると考えていました。その中でも特に重要なのが、「ルール・規則の改善」と「生徒の意識改革」です。

ルールメイキングは単なる規則の変更ではなく、綿密なプロセスを必要とします。その過程では、先生方も議論に加わり、「対話」を重視しました。この対話を通じて、すべての生徒と教員が納得できる環境を作ることを目指しました。小学5年生から高校3年生までの教員が信頼関係を築き、様々な視点から物事を考え、新たな気づきを得ることができました。また他者の意見を尊重し、生徒自身が決めたルールを守る責任感を育むことも目的の一つでした。

この理念のもと、第4回のルールメイキングを経て、2024年度2学期から新たなルールが実施されました。これは立教英國学院の歴史に置いて重要な瞬間であり、大きな一歩となりました。

## ◎職場体験プロジェクトについて

2024年度2学期から新たに職場体験という機会を設けました。学校近隣の施設や事業所と連携し、生徒が実際に働くことでイギリスの労働の実態を学ぶ活動です。英語でのコミュニケーションを通じて国際感覚を養い、イギリス社会のマナーや礼儀を学びます。また、働くことの大切さを理解し、責任感や適応能力を高める機会となります。さらに、多様な出会いを通じて視野を広げ、将来の可能性を広げることができます。



## 変革と学び

この改革に携わることは、私にとって非常に貴重な経験でした。同時に、大きなプレッシャーを感じていました。この一歩が学校の未来をどのように変えるのか。失敗を恐れるのではなく、たとえ失敗したとしても、それをいい方向へ導き、学校にとっての進化につなげることが大切だと考えています。実際に、学ぶ姿勢を持ち続けることこそが、変革の原動力であると実感しました。

この1年間を通して、学校も私自身も一人の人間として、大きく成長できたことに感謝しています。学校の方針やあり方、そして先生方の生徒に対する考え方、また生徒たちの学校に対する考え方方が、建設的で柔軟に変わっていると感じています。そして生徒会長としての経験は、私の価値観を広げ、将来を考える貴重な機会となりました。

立教英國学院は、単なる学びの場にとどまらず、英國ならではの貴重な経験を通じて国際感覚を養い、寮生活を通じて他者への理解を深めることができます。そして、互いを尊重し敬う心を育むことができる環境が整っています。本校に入学した生徒は、必ず大きく成長し、実りある卒業を迎えることだと思います。

私は、学校に関わるすべての方々と共に立教英國学院を発展させ、次の世代へつなげることができたことを、大変嬉しく思います。心より感謝申し上げます。

生徒会メンバーが大好きです。本当にありがとうございました。

第52代 生徒会長(高等部2年生 男子)

「学ぶ姿勢を持ち続けること  
こそが変革の原動力」

# Report on the 6-Week Pre-University Immersion Programme

## 高校3年生特別プログラム

Term 3 marked the launch of Rikkyo School's new 6-week Pre-University Immersion Programme, which ran from Monday, 13th January to Friday, 21st February. Designed to support the transition from high school to university, the programme provided a small group of High School 3 students with an invaluable opportunity to develop essential academic, research, personal, and life skills. By combining classroom learning with excursions and interactive workshops, the programme aimed to create a holistic and engaging learning experience.

We were also joined by a visiting student from Koran High School, Tokyo, who contributed to discussions and activities, further enriching the group dynamic.

The course was structured around themed focuses during the first four weeks:

- Week 1: Natural Sciences
- Week 2: British Literature
- Week 3: The Legal and Justice System
- Week 4: Creativity and Innovation

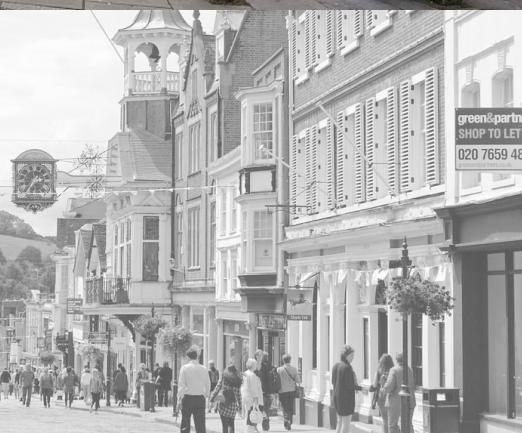
Throughout these weeks, students were encouraged to deeply engage with the subject matter, immersing themselves in an English-speaking environment while making meaningful connections between theoretical knowledge and real-world applications. The programme featured a variety of enriching experiences, including a seminar on Human Rights delivered by David Walbank KC, where students explored real-life cases where these rights were not upheld. In literature, students attended a production of Bram Stoker's 'Dracula' in Worthing, enhancing their understanding of British literary traditions. Two research workshops at the British Library allowed students to develop their academic inquiry skills while exploring exhibitions on the Windrush Generation and the Silk Road. Additionally, Melanie Brown, the school's lead first-aider, led two First Aid sessions, equipping students with crucial life-saving skills and hands on experience using a portable defibrillator. The programme also incorporated various cooking activities, culminating in an engaging Come Dine with Me event that fostered teamwork, budget awareness and creativity. In the final two weeks, students undertook independent research projects on topics of personal interest. With teacher guidance, they refined their research questions, explored data collection methods, and presented their findings in diverse formats, including laboratory demonstrations, multimedia productions, and slideshow presentations.

The students demonstrated exceptional motivation, enthusiasm, and curiosity throughout the programme. Friendships deepened, and English became the natural medium of expression and engagement. As these students prepare for their university studies, we wish them the very best and thank them for their dedication and active participation in this inaugural programme.



Guildfordの町に日本文化の出前！

# Winter Japanese Market



この企画は、今年度より僕の提案で実現されたものでした。Winter Japanese Marketを設立した理由は主に3つあります。

1つ目は、英国の方々に新たな日本文化の紹介の機会を提供したい思いからでした。結果として、立教英国学院の新たな伝統を創ることができました。

2つ目は、中学部3年生がリーダーシップを発揮できる機会を作りたかったからです。言いますのも僕は中学部年の頃から立教英国学院に在籍していました、中学生がリーダーシップを発揮できる機会が極めて少ないと感じていました。

3つ目は、英語力をより向上させる機会を創りたいと思ったからです。立教英国学院のカリキュラムには、英語力を磨ける機会が多くあります。それを実際に現地の方々に使い、本物のキングスイングリッシュに触れることが重要だと思いこのプロジェクトを設立しました。

僕は生徒会副生徒会長として、この企画を提案し中学部年生、2年生、他の生徒会執行部の皆さん、全教職員スタッフの皆さんとともにこの企画を成功させ「僕の人生で確実に一番嬉しい」瞬間となりました。また7ヶ月に及ぶ準備期間で学んだことは、人とのつながりの大切さです。自らが提案し多くの関係者の皆さんとともに企画を実現させる。これは、立教英国学院だからこそできる重要な機会だと再認識しました。変わらないために変わる。次世代のために誇りある立教英国学院を創る旅は続く。



# 3学期 フォトギャラリー



# Leaving Teachers

## ご退職された先生 からのメッセージ



### お別れの挨拶

英語科 関口 萌 教諭

今日はみなさんにさよならの挨拶をするために時間をいただきました。

いよいよ明日で3学期が終わり、卒業終業礼拝となります。P6,M3,H3のみなさんの卒業を祝い、またそれぞれの学年を終えたことを記念し、帰宅の途につく嬉しい時だと思います。明日になるとバタバタしてしまってきちんとお別れを言えないと思いましたので、校長先生にお願いしてこの時間をいただきました。

私は立教英國学院で8年間みなさんと一緒に生活をしてきました。

ここに来た8年前は、East Houseに住んでいて、岡野先生のクラス付きで、昨年の6月に教育実習に来ていた杉山くんがいた高校2年生のクラスの副担任でした。その翌年は岡野先生と一緒に高3に持ち上がり、卒業礼拝でその生徒たちを送り出しました。

その翌年からはずっと高校1年生か中学1年生の担当でした。そのおかげで、新入生と接することが多く、立教英國生みんなと接することが出来ました。今年はやっと進級できて、生徒と一緒に高校2年生へと進むことができました。

立教英國学院は夏休みや冬休み、春休みの期間が長いですが、その分、学校が開校している時間は学期のほとんどをみなさんと共に過ごしてきたなあと思います。みんなが起きる前に出勤して、教員室や学校の鍵を開けたり、シックルームにいる生徒がいるときにはご飯を届けたり、みんなで一緒に食事をとったり、授業をしたり、夜まで自習監督をしたり、時には宿直もある。こんなに密な生活はなかなかありません。ここ数年は先生たちの休みも増えて、皆さんと一緒に過ごす時間が少なくなっていますが、教室や食事の場、ドミトリーでみんなが普段考えていることや、将来やってみたいことについて話してくれたり、国際交流プログラムの中でこんなところに行ってみたいと、みなさんとたわいもない会話をする時間は、私にとってとても楽しい時間でした。先日、昼食がパエリアだった時に、晴天のもと、外で食事をしている生徒たちが「先生も一緒に食べますか？」と声をかけてくれたことも、とても嬉しかったです。

立教英國生のすごいところは、誰に対しても寛容でコミュニケーション能力が高いこと。

食事の席では毎日正面に来る人が違う。テーブルマスターにつく先生や先輩たちも違う。そういった中で、いろんな人と接しながら、周りの人のことを考えながら、お当番をしながら、周囲をみて、「今、何が必要か」ということを考えられるようになる。ドミトリー生活では一人部屋はないし、パンフレットには

Quiet Roomがあると書いてあったのに、学校にきてみると一人になれる空間が一切ない。でもだからこそ、ドミメンが泣いていたり、困っていたらそっと寄り添うことができる。放っておいてほしいというのであれば、それを察知して接してあげることができる。みんなの絆はとても強い。それは、同学年の仲間に対してだけではなく、他学年の人たちにもそうやって接してあげができる人がたくさんいる。10歳から18歳までが一緒に生活しているってすごいことなんだなあと思います。そして、そういった生活の中でみんなは優しい気持ちを育んでいるんだなあと思います。

私が私立の学校で働くのが好きな理由は、生徒の成長に寄り添い、その成長を見守り、見届けることができるからです。小学部や、中学1年生で入ってきた背の小さかった子が夏くらいになるとグンと背が伸びて、「先生より大きくなったー。」と嬉しそうに言ってくること。勉強がそんなに好きではなくて、全然やる気がなかった生徒のやる気スイッチが入って、あるときからぐんぐん成績が伸びていく様子が見られること。高校入学時にはあまり自信がなかった生徒が、様々な係や委員長などの仕事を通して立派にリーダーシップをとれるように成長していくこと。みんなの成長を目の当たりにできる教師という仕事は面白いなあと思っています。

最後に、私が大切に思っていることを共有したいと思います。『「ありがとう」と「ごめんなさい」をきちんとすること』です。「ありがとう」はいつも人を笑顔にするし、「ごめんなさい」ときちんと謝ることができるのは、間違ったことをしまってもちゃんと許されます。誰かのせいにしたりしないで、きちんと自分と向き合ってください。小さな事かもしれないけれど、「ありがとう」と「ごめんなさい」がきちんと言える人は、誰からでも愛されます。

本当はもっとみなさんとお話ししたいこともあるし、もう1年、今の高校2年生と一緒に過ごせたらいいなあとも思っていたのですが、一足先に日本に帰ることにしました。

もう、4月に「おかえり」と言ってみなさんを迎えることはないんだなあと思うと淋しい気持ちになりますが、今まで皆さんと一緒に過ごしてきた時間は宝物です。今後は日本から、みなさんの活躍を応援したいと思ってます。ありがとうございました。



### 退職教員

金子 浩和 教諭(理科・物理)

森 弥栄子 教諭(社会・日本史)

牧 周佑 教諭(数学)

関口 萌 教諭(英語)

塩谷 知絵 教諭(数学)

山縣 愛 教諭(国語)

大庭 鈴音 教諭(理科・生物)

佐藤 愛美 教諭(小学校)

松永 花菜 教諭(保健室・養護)

Ms. Alison Sutton (Music)

Mr Barry Sutton (Music)

Mr Mike Hopwood (EC)

Ms Roksana Malkiewicz (EC)



# PHOTO GALLERY



SNS オフィシャルサイト



## Information

ご意見・ご感想はこちらへどうぞ。

►► [publicrelations@rikkyo.uk](mailto:publicrelations@rikkyo.uk)

第298号 2025年3月22日 発行者 立教英国学院  
Rikkyo School in England Guildford Road, Rudgwick,  
West Sussex RH12 3BE <https://www.rikkyo.co.uk>